



既存校舎との間に設けた庭園からみるトリニティホール。木々の間を抜けてそのまま2階に向かう階段、奥には正面玄関がつくられている



北東側外観。三角形の青は学院のロゴに使われている色



屋上は庭園のように緑化されている。囲んでいるのはトップライト



西側外観。右側の枝の奥にみえる地窓は既存校舎のデザインを継承



北側外観。外壁を傾斜させて「大地から生える」デザインを具現化した。夕暮れには屋根を支える飛燕垂木が美しくライトアップされる



エントランスをくぐると右にラウンジ、左がスタッフルーム、正面に階段とエレベーターとわかりやすい配置になっている。吹抜けからみえるトップライトはクロス(十字架)をイメージしており、交差部には風力発電を電源にするネオンアートが取り付けられている



ガラスのマリオンにつくられた十字架。新校舎には十字架を意識したものがいろいろとつくられている

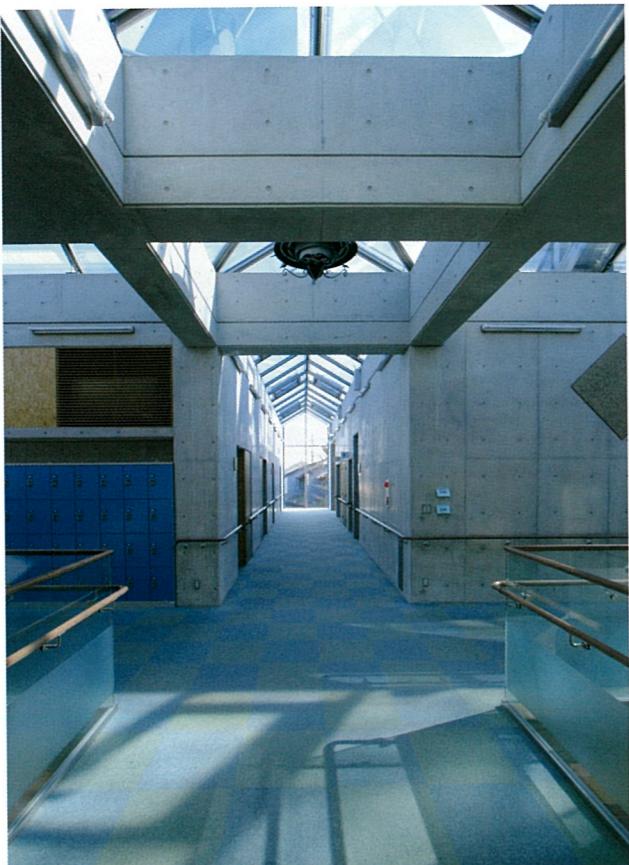
## キャンパス新名所

第4回

### 武藏野の自然に調和する新校舎

ルーテル学院大学 トリニティホール

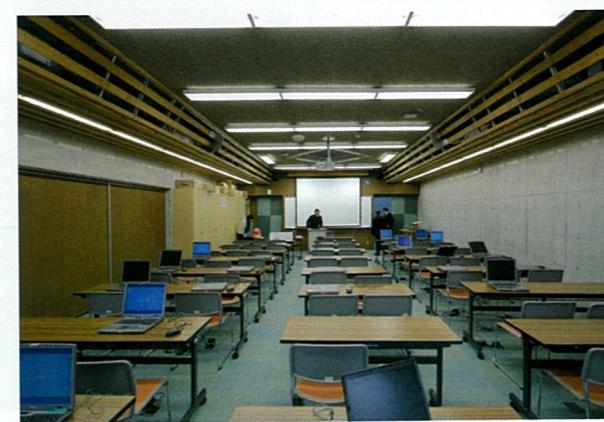
東京都三鷹市にキャンパスを構えるルーテル学院大学は、臨床心理学科創設に伴う教室不足の解消などを目的に、新校舎を建設した。完成したトリニティホールはICT設備の整えられた大小様々な教室のほか、ラウンジやスタッフルームなどが設けられた建物である。この建物の最大の特長は、計画時に学生を対象にしたワークショップを行い、学生の考える“今のキャンパスとこれからの校舎”も設計に盛り込んでいることである。



クロスするトップライトをそのまま通路としたことで、建物内はとても明るい。トップライトには光触媒を用いており、散水システムも備えた。打水効果のほか、既存チャペルのデザイン要素の継承もある



手前と奥に2つある左側の大教室への入口の庇にはアカデミックカラーの黄色と紫を使用



各教室はICT設備が充実している。天井の木格子など、木を意識的に使用しているのはワークショップから得た考えだという



大教室の折戸を開け放つことでルーフテラスと一体化する。中央の柱は、もとこの場所に生えていた木でデザインした



大教室。ハイサイドライトをとるために、屋根を持ちあげている。木架構の屋根は耐火性能検証法により実現



ラウンジの折戸も開け放てばウッドデッキと一体化できる



ラウンジも設計者の連氏が学生とのワークショップの中で必要性を感じた場所だという。右側の壁面の赤もアカデミックカラーのひとつ



2階ルーフデッキ。埋め込まれているタイルは学生や教職員のデザインによるもの



入学式の歓迎会を大教室で開催。折戸を開放して桜の景色を取り入れている



ベンチを設けたことで、休憩に、会話に、さまざまに使われるルーフデッキ



南側外観。窓の庇は既存校舎のデザイン要素を引き継いだ



小教室



階段の大窓は全面ガラスとして武蔵野の四季を感じさせる絵画的効果と演出



ロビーでは、学生が集まり語らう姿を日常的に目にすることができます



ロビーにある地窓も、既存校舎のデザイン要素を受け継いで設けたもの



多様な使いができるロビーは、懇親会の会場にもなる



入学式。建物に入る学生を歓迎する演奏をウッドデッキで行った



好天時には、ウッドデッキで過ごす学生の姿もよく見かける



トリニティホールの設計を前に、学生と行ったワークショップの様子



ワークショップでは、新校舎にかける夢をコラージュにして発表



2階のルーフテラスに埋め込まれるタイルを作成する学生



エントランスから続くホール。写真の撮影が年末だったためにホールには大きなクリスマスツリーが置かれているが、それでも狭さは感じないゆとりがある。吹抜けの上階に目を送るとクロスする廊下の中央につけられたネオンアートを目でできる。

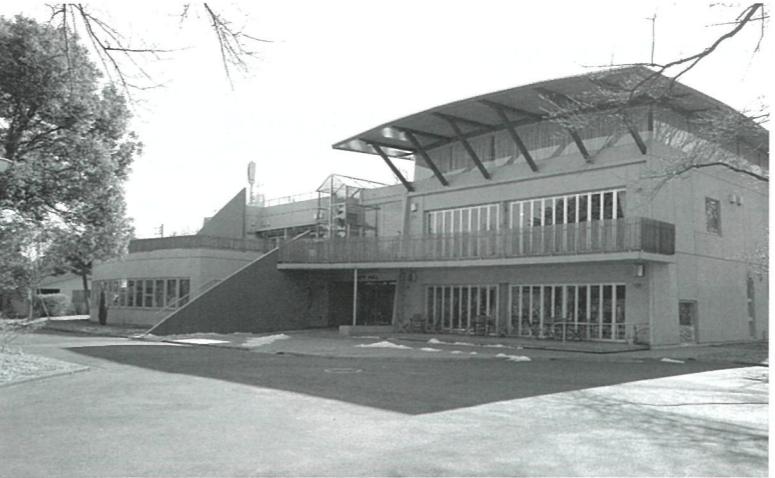
## キャンパス新名所

第4回

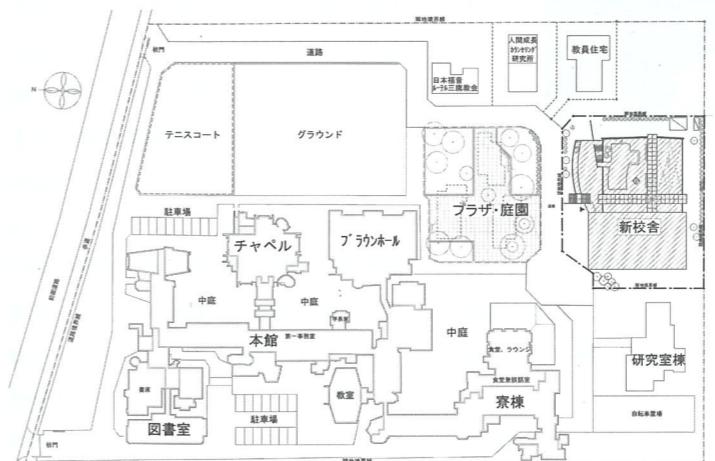
# ルーテル学院大学 トリニティホール

## 巨匠による既存建築との 向き合い方

明治42（1909）年、熊本市に開校した路帖神学校を始まりとするルーテル学院大学。昨年、創立100周年を迎えた。東京都三鷹市西部の現在の地にキャンパスを構えたのは昭和44（1969）年。国際基督教大学（ICU）、東京神学大学に隣接し、その先には野川公園が広がり、都会に形成されたひとつの大きな緑のエリア、その一角にある。同時に両大学との連携も深い。同大学では従来のキリスト教学科、社会福祉学科に加えて臨床心理学科を創設するにあたり、学生のための教室やスタッフのための管理諸室を充実させるために新校舎を整備することになった。



北西側外観。壁で支えるフラットスラブ構造を採用しており、柱や梁が室内に出てこないため内部空間を広く確保している



配置図

ルーテル学院大学のキャンパスは、わが国を代表する建築家のひとりである村野藤吾氏の設計として知られている。

今回の新校舎を設計するにあたり、設計者の連健夫氏は、新校舎の提案では村野氏の設計をどのように受け継いだ提案をするかが重要と考えたという。

当初は設計コンペの条件整備のアドバイザーを依頼され、既存校舎についての調査を重ねた氏であるが、ルーテル学院大学と村野建築の歴史的文化的価値を踏まえた条件提案が評価され、学院の理事会から特命で設計者に選ばれた経緯がある。

## 学生のワークショップ

連氏が学院に提案した内容の中に、プロセス重視があった。具体的な手法

として学生参加のワークショップの開催をあげている。これは、学生も大学施設の主たる利用者のひとつでありながら、なかなか施設整備にあたってその意見が反映されることがなく、結果的にハード的な条件からつくられる傾向が強いと考えたからだという。

2日かけて行われたワークショップから学生の既存キャンパスや新校舎への思いを読み取った連氏は、これらのポイントを学院からの要望や条件に加える形で設計に盛り込み、完成した新校舎が“トリニティホール”である。

RC造2階建の建物は、1階に管理諸室とラウンジ、ゼミ室など。2階にはそれぞれ広さの異なる教室とコンピュータをそろえたメディア教室を整備。十字架をイメージして配置した通路に並べてつくられている。木と曲線を用いたデザインによってやわらかさと温かみを感じることのできる建物である。また、学生とのワークショップから求められていることを感じたという生活のためのエリアとして整備したラウンジと折戸を挟んでつながっている外部のウッドデッキテラスは、学生日常の生活や行事の折に思いもよらぬ活用をすることもあるという。

参考文献 連健夫『心と対話する建築・家一心理・デザインプロセス・コラージュ』（技報堂出版）

## 施設概要

所在地：東京都三鷹市大沢3-10-20  
用途地域：第一種中高層住居地域  
建ぺい率：55%（許容60%）  
容積率：93%（許容200%）  
敷地面積：1956.56m<sup>2</sup>  
建築面積：1076.13m<sup>2</sup>  
延床面積：1820.68m<sup>2</sup>  
構造規模：RC造（一部木造）地上2階  
設計期間：平成16年3月～平成16年12月  
工事期間：平成16年12月～平成17年12月  
設計：連健夫建築研究室（建築）、ストラクチャード・エンヴィアイロンメント（構造）、島津設計（機械設備）、近藤建築設計工房（電機設計）  
監理：連健夫建築研究室  
施工：鹿島建設（建築）

■外部仕上げ  
屋根：ガルバリウム鋼板  
屋上：コンクリート、屋上緑化  
外壁：コンクリート打放  
開口部：アルミサッシ、SUSサッシ、木サッシ

■内部仕上げ

<大教室>  
天井：OSB  
壁：パーキサイクルボード  
床：フローリングブロック  
<教室>  
天井：木質セメント板  
壁：パーキサイクルボード  
床：タイルカーペット

■空調設備  
冷暖房方式：電気冷暖房、水冷システム（雨水利用）  
その他設備：風力発電機

■学校概要  
学長：市川一宏  
URL：<http://www.luther.ac.jp/>  
電話：044-31-4611  
交通：JR武蔵境から小田急バス、西野停留所下車2分

[対談] ルーテル学院大学事務長 高瀬恵治氏 & 建築家 連 健夫氏が語る

## ルーテル学院大学にみる“学び生活する”新校舎整備 学生参加のワークショップをプロジェクトに取り入れる



ルーテル学院大学事務長 高瀬恵治氏(左)、建築家 連健夫氏(右)

東京都三鷹市にあるルーテル学院大学は、キリスト教学科、社会福祉学科に加え臨床心理学科が創設された。それに伴い校舎が手狭となり新校舎を建設した。このプロジェクトの大きな特長は、設計のプロセスにおいて学生参加のワークショップが実施されたことである。一般に大学校舎の設計においては、大学側と設計者間の打ち合わせによって計画されるのであるが、その場合どうしても学生の要望に対する優先順位が下がりがちとなる。そこで当プロジェクトでは建築家の発案により、新校舎に対する学生の要望、嗜好、イメージを取り入れるべく学生参加のワークショップが提案され、大学側に受け入れられた。また既存キャンパスは巨匠・村野藤吾氏の設計であるため、新校舎の設計において、設計コンセプトの継承も重要な要素であった。従って、ワークショップにおいては、既存校舎の建築学的価値の説明がされ、学生が自らのキャンパスに対して、誇りを持ち、環境に対しての理解を深める良い機会となった。その上

で、ブレーンストーミングとKJ法により既存校舎の良い点、悪い点が抽出されるとともに新校舎のイメージを共有すべくコラージュづくりが行われた。ワークショップを建築家自ら実施するとともに、そこから得られた示唆と経験を設計内容に反映することにより、学生が求める“学び生活する新校舎”が実現したのである。(連健夫氏)

連 本プロジェクトでは、実施に際して学生（利用者）の意見を取り入れるためのワークショップを提案して行いました。このプロセスは実はとてもユニークなもので、設計段階でのワークショップでは、コラージュづくり（※1）やKJ法（※2）等を行い、学生達のイメージを引き出しました。それらを通して彼らが普段このキャンパスでどういうことを考えているか、新校舎に何を求めているのかがみえてきて、それをデザイン、設計に反映させることができました。

学生参加のワークショップは高瀬事務長に間に入って頂き、大学側の理解

と協力の上2日間も時間を割いて頂き実現できました。その際、併せて先生方へのヒアリングでも幅広く要望を聞くことができました。工事段階でのタイルづくりワークショップは20名程度の学生が参加し、タイルのデザインは学生だけでなく学長をはじめ学内のいろいろな方々にもお願いして、合計で45名ぐらいの方がかかわることになりました。それが新校舎のルーフテラスに貼られています。この形が、ワークショップからイメージした参加のデザインの1つなのです。

それでは、こうした新しい取り組みの経緯から聞かせてください。

高瀬 本学のキャンパスは、文化勲章を受賞された建築家の村野藤吾先生の設計です。今までの増築や改修に際しては基本的に村野建築を踏襲する考え方で理事会も進めて参りましたが、村野先生の事務所で、事務所としてもお受けしにくくなってしまったようです。また、これまでの増築や改修では従来の建物に接続する形が多かったのですが、今回の計画は既存の校舎から少し離れたところでした。そこで、以前お世話になった連先生にお願いしてみようということになりました。そのため、私どもも今回は新しい試みを模索してきました。ワークショップをはじめ、連先生からいただいた提案を学内で設けた建築委員会で協議し、



ワークショップ1日目。参加した学生にキャンパスの建築的価値について説明する

先生とご相談しながら対応していきました。

学生を計画に参加させることは私どもでも確かに斬新でした。設計の段階で施主と設計者のやりとりはあると思いますが、施主側の関係者と位置づけられるのでしょうか、主体となる利用者、つまり学生を参加させる方法は珍しかったと思います。進行は連先生にお任せして、私どもは日時を決めて学生を募集し、賛同した学生が集まり、先生の指導のもとにいろいろなコラージュをつくりました。

紙の上にいろいろとイメージするものをおいていく作業でしたが、そこで先生がイメージされたのが、“あたたかみのある木のイメージを学生が求めているのではないか”ということだったと思います。本学のキャンパスは緑の多い環境なので“木を学生が求めているのではないか”と。そこから先生の設計が始められたのでしたね。

タイルづくりも、1つ記念になるものができたらいいなとご提案頂いて、このときは学生だけでなく教職員にも「何月何日までにタイルのデザインを寄せて頂ければ、それに基づいて製作ができます。ご自身でタイルをつくることも可能ですか」というご案内を頂き、全員ではありませんが、集まれる人でタイルをつくりました。それが2階のルーフテラスに埋め込まれています。

連 学生が関わって完成したわけですが、実際にどういう効果があったか。これは評価として1つポイントになることです。学生の普段の生活をご覧になって、そうしたプロセスを経た建物のよさを学生が感じているか、どう思われますか。

高瀬 学生にアンケートをとる場合、施設に関してはキャンパス全体を対象に行っております。この建物だけを対象に行ってはいないので、はっきりと「こういう意見がある」とはいえませんが、新しい建物なのでバリアフリーも整っております。本学には障がいを持っている学生も多いので、彼らにとっては最新の施設が使えることはありがたいのではないかと思っています。

編集部 村野建築との一番の違いはバリアフリーを随所に取り入れたことと連先生もおっしゃっていましたが、これは学院の要望でもあったわけですか。

高瀬 はい。私どもは社会福祉学科を擁していることに加え、先にも述べましたが障がいを持った学生も積極的に受け入れておりましたので、過去に行った本館の改修でもトイレだけでなくバリアフリーには気をかけて対応しています。今では珍しくありませんが、将来をみながら計画してきたつもりです。連先生との接点も実はそのバリアフリーの改修工事でした。そうしたこ

とが、今回先生にお任せしようということにつながっています。

連 そうでしたね。村野先生の建物は風景をつくることや光を取り入れることは素晴らしいのですが、唯一の弱点といえるのがバリアフリーでないことです。具体的には廊下がジグザグして人がぶつかってしまうところや段差・高低差があることで、この点だけは様々に問題を抱えています。ですから新校舎も“村野建築のよさは活かしていこう。でもバリアフリーはしっかりしないと”と思いました。

今のお話で興味深いのは、参加のデザインは直接的にあらわれてはいないようですが、それもまたポイントだと思います。実は参加の方法について、「一部の人だけが参加しているため、その人のアイデアだけが反映されているのではないか」といわれる場合もあります。しかし、「人数は少なくとも学生が関わった」ことが重要で、ワークショップに全員が参加することは無理な状況ですから、参加した彼らの意

志が設計に反映されなければ、それは他の学生が使うときにも共通点があるのでないか。こう捉えると、使われることそのものに意味が出てきます。完成後に観察すると、普段のデッキで学生達が使っている様子や学園祭で使っている様子、ラウンジを使っている様子など、日常の生活で学生が選んで、好きで使っている状況を目にしてしまします。そこには、学生の創造性を活かすきっかけになるデザインのエレメントが建築にあるのではないかと思っています。それがワークショップの中で得られたものであると思っています。

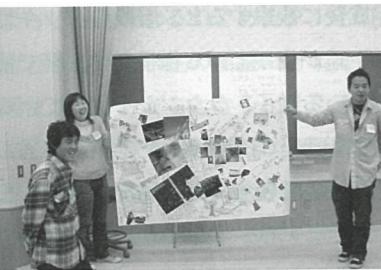
編集部 ワークショップについて教えて下さい

連 参加学生は17名から20名で2日間実施しました（※3）。初日、既存校舎の建築的価値を説明すると、学生の反応は「えっ、そんなすごい建物

なんだ」と表情がガッと変わるのがわかりました。その後結構質問がきましたね。「村野さんて誰ですか?」というのもありました。建物をテーマに学生との間でキャッチボールができ、「私たちのいる学校って素晴らしいんだな」と再認識して誇りに感じている学生もいるようにみえました。その後、既存校舎のいいところと悪いところを自由に意見を出してもうためKJ法を用いました。

**編集部** 具体的にはどのようなやりとりだったのですか。

**連** このときは1年生から4年生まで参加してくれました。参加した学生には、物珍しさもあったと思います。まずスライドでキャンパスの説明をして、そのあとで「たから」と「あら」、キャンパスの宝と粗を探しました。「たから」はいいところ、「あら」は問題点です。それを各自がポストイットに書いて、大きな模造紙に貼り付けて分類しました。この内で、学生達はこのキャンパスを愛していて、非常に親しみを持って過ごしていることがわかり、それを設計に活かしていくこうと思いました。「あら」ではバリアフリー



ワークショップ2日目。新校舎の夢を集めたコレージュを発表。連氏は中央に十字架が書かれていることに着目



タイルづくりの様子

でないことなどが具体的にあらわれ、学生達はしっかり見ているなあと感じました。

**編集部** 学生さんは村野藤吾氏のことあまりご存じなかったのですか。

**高瀬** 建築を学んでいる学生でなければわからないと思います。村野藤吾先生、ましてや丹下健三先生のお名前を出しても、「誰ですか?」という世代です。本キャンパスも現代建築百選には選ばれていますがみんな建物についてあまり関心がありません。ただ、他の学校で建築を学んでいる学生さんから見学させて下さいという連絡は時々きます。

**連** テレビなどでの撮影でも使われますよね。絵になるキャンパスです。そんなこのキャンパスを愛している、誇りに思っている。それがこのワークショップではっきりしました。

**編集部** キャンパスを再認識する良いきっかけになったわけですね。

**連** なったと思います。ワークショップは「新しい校舎のための」というだけではなく、「今のキャンパスを再認識することで、状況が変化する」というおもしろさがあります。そして2日目ですが、学生達は既存キャンパスについての分析ができたものを下地に、今度は新しい校舎での夢をコレージュで表現しました。あらかじめ、新校舎の夢を切り貼りするから、雑誌からイメージを持ってきなさいと初日に説明をしておきました。みんなで持ってきたイメージをペタペタと用紙に貼り付けていったのですが、賑やかな作業になりました。楽しかったですね。1日目は分析で2日目はイメージづくりですから、楽しい作業になります。貼り付けてスケッチを加え、発表のときも「私達のグループは……!」と、真剣に説明してくれました。

**編集部** 学生が選んだ写真とは他の大学の校舎ですか?

**連** いや、校舎ではなく好きなイメージでした。どこかの大学の写真ではなく、自分が旅行したときの写真や雑誌からのイメージです。そしてここではっきりしたのは、みんなとても思いが強かったです。そのため密度が濃いコレージュができましたね。それとあるグループのものは真ん中に十字架がありました。これが重要で、そこに太陽があつて日差しがあり、たくさん日光が入ってくる。そして、木のイメージがありました。あらゆるところに木や葉っぱ、植栽のイメージが貼られているのが印象的でした。他にデザインキーワードとして曲線美などがあります。曲線のイメージ、優しさがあった方がいいなと読みとりました。

**編集部** 新校舎ができるがての学生さんの反応はいかがですか。

**高瀬** 今までの校舎とは趣が違うのと、色づかいもこれまでと違って原色に近いものが入っていましたので、最初は少し戸惑いましたが徐々に慣れていったようにみえます。新校舎で使っている色は本学のアカデミックカラーです。これは各学科に属する色で、教員が海外で学位をもらうときに着るアカデミックガウンにフードと呼ばれる羽根のようなものがついていますが、ここに使っている色です。社会福祉学科が黄色、臨床心理学科が紫、キリスト教学科が赤です。この3色を校舎の中でも使えば赤をホールの壁面、2階の大教室の入り口の庇に黄色と紫を使っています。ブルーは、ルーテル学院のロゴに使っているイメージカラーです。また、既存校舎とは違うといながらもキャンパスとしての融合は当然考えます。既存校舎の外壁はクリーム色なので、それをこちらの校舎の壁でも使っていきます。

それから、この建物の名前も公募しました。トリニティホールとは、学生が付けた名前です。「Trinity」とはキ



入学式の際にウッドデッキで行われた演奏



普段のロビーの様子



ロビーでは懇親会のような催しも開くことができる

リスト教では「三位一体」を指す言葉ですが、それを私どもの解釈として3学科、社会福祉学科、臨床心理学科、キリスト教学科の3つが一体となって本学をなすという意味を学生が持たせたことがたいへん光りました。ミッションスクールでもありTrinityという言葉には理解もあることから、これにしようと決めた経緯があります。

**編集部** 身近なキャンパスとして人と人がふれあえる規模ということなのでしょうか。

**高瀬** ええ。そもそも小規模です。総合大学からみれば1つの学部単位が私どもの全学科になると思います。

**編集部** 教職員も学生の顔もよく見える。常にコミュニケーションを図つていける、家族的であるなど、そうしたよさが中にあふれているような大学、キャンパスですね。

**高瀬** ええ、そう思います。自分が学んでいる別の分野を学んでいる学生もすぐ隣にいるのも本学ならではでしょう。校内には職員住宅や寮もあるの

で、家庭的な雰囲気があると思います。そういう点、大きな大学は無機質といいますか、駅近くのビルで、遊びに行ける街が隣にある。それが便利だという人もいるでしょうが、そうした雰囲気とは少し違うと思います。

**連** 校舎も身近に感じられれば、使い方の工夫をすることの面白さを学生も気づくと思います。与えられたもので

はないことにより、自由な発想を生むことになります。校舎のつくり方がそういうです。先生方の学生への接し方も学

生の自主性や創造性を期待しています。それがはつきりみえたのは学園祭でした。校舎の前にステージを置き、とてもいい感じで使っている。新校舎と伝統あるキャンパス、先生方や職員の方の学生に対する態度が、学生の使い方の創造性を刺激しているのではないかと思いました。今、登校拒否とまではいかないが、大学には所属しているが授業にはでていない学生、自分の人生の目標がなくただ入っただけの学生の問題を、多くの大学が抱えていますが、この大学ではそれらを感じることはない。各学生の目的意識はしっかりとしていて、先生と学生の距離が近い。ラウンジでも先生と学生がテーブルに座って話をしている。そういう状況を私は訪れるたびに目にします。こうした1つひとつが、今後の大学のあり方を考える上でよいヒントになるのではないかと思うのです。

(※1) 切り貼り絵。理想の建築(この場合は校舎)をテーマに雑誌などから好きなイメージや写真を持ってきて自由に貼りつけてつくった絵。これをもとに話を進めることで価値観や思考がみえてくるという

(※2) 文化人類学者、川喜田二郎氏が考案した問題解決技法。アイデアや意見などの情報を1枚ずつカードに書き、それらを分類することで何が重要なのかを導き出すことができる。

(※3) 2004年1月28日、30日

※1※2は連氏の著書『心と対話する建築・家—心理・デザインプロセス・コレージュ』(技法堂出版)を参照

## 設計メモ

### ルーテル学院大学におけるトリニティホールの位置付け

ルーテル学院大学学長 市川一宏



Q. 現代の大学教育を実践していくため、既存施設を活かしながらのキャンパス整備をどのように実施されているのか教えてください。

A. ルーテル学院の敷地には、礼拝堂が中心にあります。人を愛し、存在を大切にする日本ルーテル神学校とキリスト教学科、生活を支える社会福祉学科・大学院社会福祉学専攻、心の痛みを癒す臨床心理学科・大学院臨床心理学専攻によって構成される総合人間学部の源流にあるのは、愛であると考えています。

ルーテル学院の歴史を紐解きますと、1909年、熊本で日本路帖神学校が創されました。その後、鷲宮時代を経て、1969年に三鷹の現在地に移ってきて



カラスにアクリルを貼りつけて水の流れまるさまを表現したチャペルのステンドグラス  
散水システムで既存チャペルのデザイン要素を継承した

ました。はじめに、礼拝堂と本館、図書館が建てられ、さらにブラウンホールの建設、食堂の増改築、図書館の増築、トリニティホールの建設、神学生寮・女子寮・学生ラウンジ等々の整備を行ってきました。いずれも、大学の再編と密接に関わる記念の事業であり愛の実践であったと確信しています。

日々、礼拝堂の文化的・建築的価値が認められ、文化財として位置づけられることになると思います。ここを軸に、自然豊かな学びの空間、地域における交流の場として広げていきたいと考えています。

Q. トリニティホール完成により、学生の学びと生活にどのような変化があったでしょうか。

A. 本大学としては大きな教室とコンピュータ室、ゼミ室、ラウンジができる、学生の選択肢が大きく広がりました。学生たちは、ラウンジのテーブルを囲み、それぞれに出会い、互いにいたわり、励まし合いながら、豊かな人間性を培っていきます。またレポート執筆や国家試験勉強の時は、資料を並べて、研鑽を積み重ねています。

「ほっと」できる空間、勉学を通して築いていく「ネット」、そして専門職として必要な時に対応できる「フットワーク」。すなわちほっとワーク、ネットワーク、フットワークの場が、トリニティホールであると思っています。

### 学生が求める“学び生活する新校舎計画” —プロジェクトに学生のワークショップを取り入れ—

連健夫建築研究室 連健夫

新校舎の第1の特徴は、打放しコンクリートのどっしりした外観に曲面の庇、そこに設けられた木格子、大きく架かった木造屋根で構成されるユニークな外観であろう。学生ワークショップで得られたイメージ「安定感、木質

感、曲線美」が反映された。校舎の立面をよく見ると台形となっている。壁や柱が若干ではあるが傾いている。このことにより、構造的安定性をつくると共に、内部空間において囲まれた雰囲気とダイナミックな空間を作り出

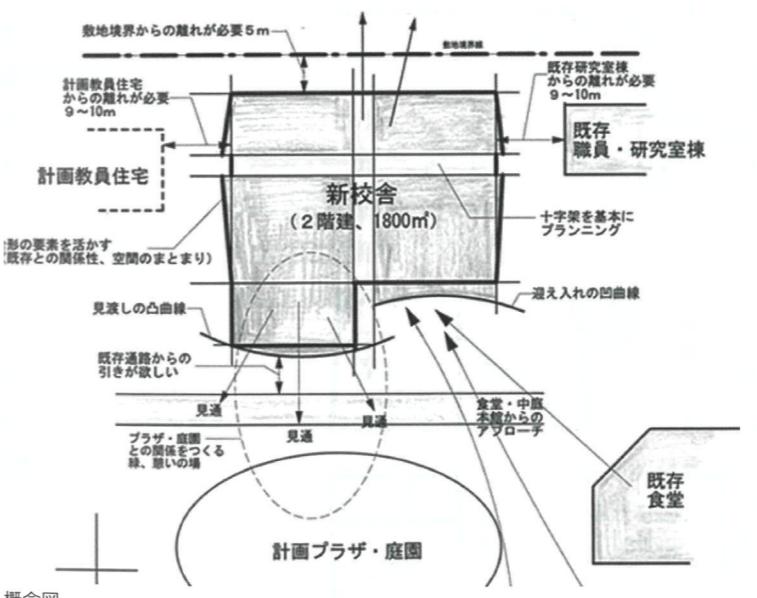
ている。既存校舎のチャペルは、村野氏の建築的特徴「地面から生えるような建築」であり、そのデザインの継承でもあるわけだ。大教室の屋根は、耐火性能検証法を用いることにより、ダイナミックな木架構とし、RC造に趣

を与えている。

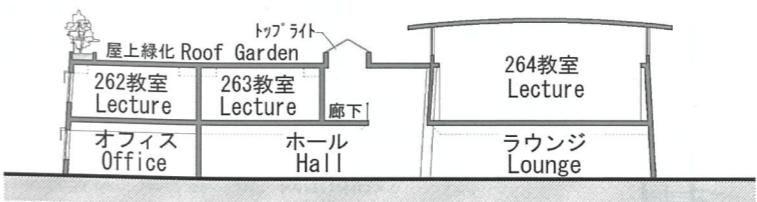
第2の特徴は、十字架形から全体が構成されている点である。学生ワークショップにおけるコラージュづくりでも十字架が表現されていた。ルーテル学院大学はルター派のプロテスタントの大学であり、十字架はキリスト教の重要な象徴である。既存チャペルも十字架形から設計されていた。新校舎平面は十字架形に配された廊下から構成されると共に、その上部に設けられたトップライトも十字架形となっている。吹抜けの内部空間はトップライトからの彩光で、明るく、広がりのある雰囲気を作っている。トップライトには、省エネの技術的工夫として、水冷ビルのアイデアが取り入れられている。トップライトのガラスに雨水を散水することにより、夏季における冷房負荷を下げている。中央階段の大窓にも散水され、隣接するICUの緑の景観にゆらぎを与えていた。既存チャペルには、ガラスにアクリル片により水を

表現したステンドグラスがあるが、新校舎では本物の水を用いることにより、その継承としているわけである。

3つめの特徴は、生活スペースの充実が図られたことである。既存キャンパスには、ロビー、ホワイエ、エントランスホールといった休息の場、ゆとりの空間が無い。唯一、食堂がその機能を果たしている状況であった。学生の要望で強く求められていたのが、生活系としてのゆとりの場であった。それを受け、新校舎には管理系としての事務室や会議室、学習系として小教室、中教室、大教室が設けられ、それに加え生活系としてのゆとりの空間が内外に設けられた。エントランスを入れると大きな吹抜け空間があり、その右側にオープンなロビーが設けられた。そこでは、休息、打合せ、先生と学生とのミーティングのみならず、時には、懇親会、パーティーなどの催しなど多様に使われている。その外側には木製デッキが設けられ、テーブルとイ



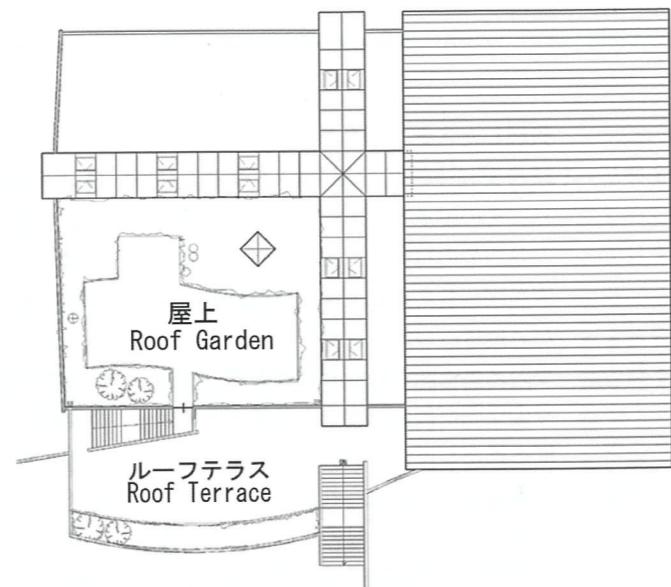
概念図



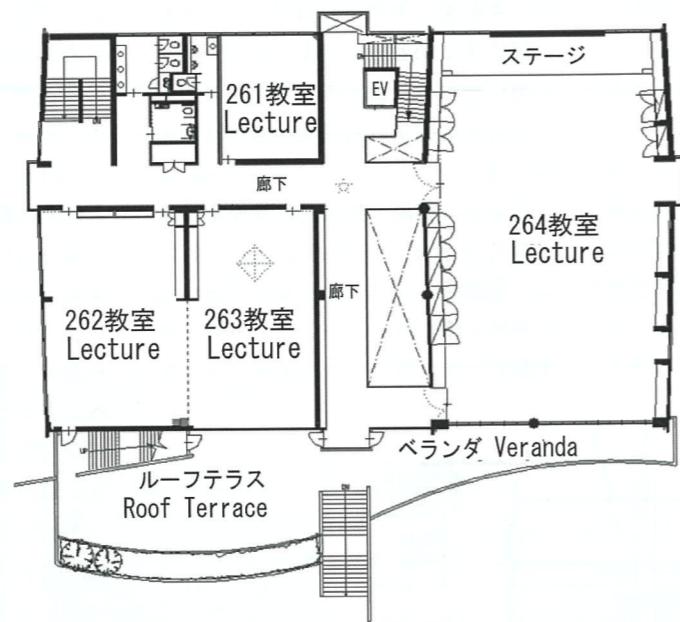
断面図

スが置かれている。文化祭では、そこはステージとしても利用されている。ロビーのサッシは全開口し、外と中を一体に使うことが可能となっている。2階にはルーフデッキが設けられており、そこには外階段からも2階廊下からもアプローチすることができる。大教室のサッシも全開口し、外と中とを一体に使うことができる。ここには木製ベンチが置かれ外部のゆとりの空間となっている。木製ベンチは新校舎建設時に伐採されたヒマラヤ杉から作られた。これも既存の継承と言える。床には学生ワークショップによって作られたタイルが貼られている。学生各自の作品が新校舎に存在するわけである。ルーフデッキから更に外階段で屋上に行くことができる。緑化され、ここにも木製ベンチが置かれ、休息の場となっている。生活スペースを豊かにする工夫として、ロビーの窓には地窓が設けられている。これは既存校舎にもあり、和風建築のエレメントである。2階廊下の中心には、ネオンアートが設けられている。一般電源のみならず風力発電によっても点灯する。

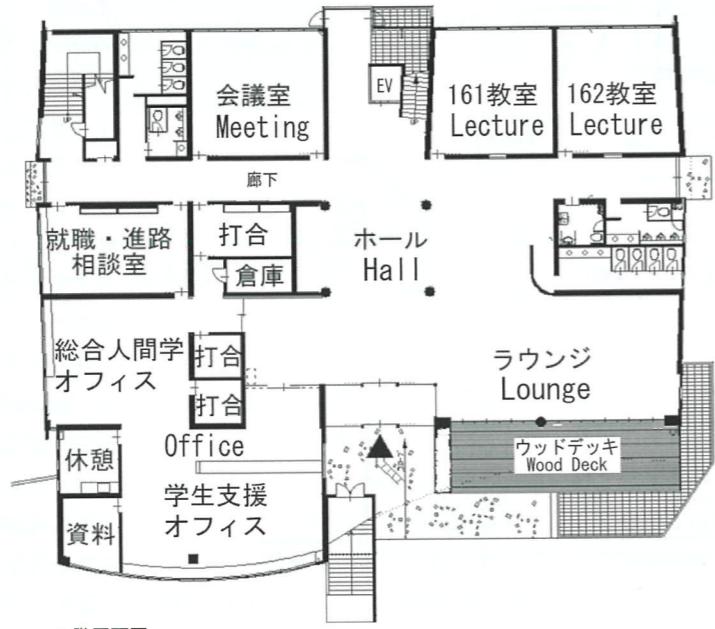
大学校舎といった公共的性格を持つ施設において、利用者である学生がワークショップを通して設計プロセスへの参加が実現し、学生の要望や嗜好、イメージが新校舎の設計に反映されたわけである。そのことにより、使いやすい施設になったことのみならず、学生が新校舎に対してより親密感を持ったことは言うまでもない。ワークショップは、時間と面倒の負担を設計者、施主側にもかけることにはなるが、そのことにより得られる質の高い建築、利用者にとってかけがえのない建築の意味は大きい。つまり参加のプロセスが、建築に新たな意味と価値観を与えるのである。公共的な性格を持つ建築には、このような参加のデザインが、今後益々求められるようになってくるのではないかろうか。



屋上平面図



2階平面図



1階平面図